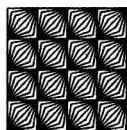


瀬沼茂樹
作家の素顔



河出書房新社

作家の素顔 ©1975

一九七五年四月三十日発行

著 者——瀬沼茂樹

発行者——中島隆之

発行所——株式会社河出書房新社

東京都千代田区神田小川町三ノ六 郵便番号一〇一

電話東京二九二・三七二一

振替東京一〇八〇二

印刷——中央精版印刷 製本——岸田製本

定価は函・帯に明示してあります

目次

I

井伏鱒二

8

舟橋聖一

21

丹羽文雄

23

石川達三

35

木俣修

47

井上友一郎

52

檀一雄

58

野上弥生子

65

II

国木田独步

78

島崎藤村

87

藤村 I

87

藤村 II

97

藤村と芭蕉

105

田山花袋

112

芥川龍之介

126

川端康成

137

中島敦

168

阿部知二

173

『冬の宿』

173

『人工庭園』

181

火野葦平

187

伊藤整

190

文学的出発の前後

190

現代知識人の苦悩

197

初期文学理論の成長

205

『年々の花』の成立

212

『虹』

220

坂口安吾

225

宮本百合子

237

岡本かの子

249

平林たい子

254

Ⅲ

近代の評論家たち

264

昭和（戦後）の作家たち

278

Ⅳ

文六同時代記

処女作のころ

329 292

有島武郎

横光利一

331 329

伊藤整

334

『新潮』作家論集」について

336

あとがき

353

発表誌紙一覧

356

作家の素顔

I

井伏鱒二

一

同時代に生きる作家のなかで、私のもっとも敬愛する作家とはいえば、私の親しい友人の誰彼をひとまず別とすると、まず第一に井伏鱒二をあげる。私もよりはるかに年長ではあるが、文壇への登場は三十歳の声をきいてからであり、『鯉』を皮切りに、『谷間』『朽助のゐる谷間』『山椒魚』『屋根の上のサワン』などと、忘れがたい名作をぞくぞくと発表して、『夜ふけと梅の花』『なつかしき現実』の二冊の短篇集にまとめたのが昭和五年前後であるからである。そのころ、新興芸術派といわれた反マルクス主義的な新進作家の団結があり、そのなかで中村正常などとともにナンセンス文学などと呼ばれていた。そのころから、彼は一風変わった人物を登場させる新鮮さで、私どもの心を深

くとりえるところがあり、近ごろ『井伏鱒二全集』十二巻をいくどとなくくつてみて、なによりもなつかしくおぼえるし、それがいまなおすこしも色あせることのない実質をもって、心をあたためてくれる玄妙さを發揮している。私は改めて同時代の作家のなかでいちばん敬愛する人は井伏鱒二であることを確認する。

井伏は時勢粧によって中村正常などともにかつてはナンセンス文学と呼ばれたことのあるのはすでにふれたし、私も当時そんな音頭をかついだ末席の一人にちがいないが、この道化たいびつな笑いのイメージの原型をさかのばれば、宇野浩二の初期の作品群あたりにみてとれる。宇野浩二の初期作品には一種の大阪漫才、むしろ関西系の高級落語めいたところがある。とっぴな題材、風変りな場面の設定から、人生の屈託を、笑いにふきとばすような饒舌な話術の妙をもって語ろうとするところまでを含めて、そういえるだろう。宇野は風変りな色恋沙汰をもって道化芝居につくりかえたが、むしろこれをもっと近代化、いや、モダン化したのは中村正常の方であり、井伏鱒二の作品には一種の高級落語めいた特色があるにしても、いささか異なったものをもっている。平凡な庶民生活のなかにみられる人生の断面を巧みにきりとって、ひとを笑いにさそう言葉の綾で、作者のある種の風懷までをこめて、技術的につく

りだされる健康なものだからである。

考えてみると、東北の太宰治、石坂洋次郎から江戸の夏目漱石にいたる東北・関東文化圏の笑いと、内田百閒、宇野浩二から木山捷平、古川洋三、井伏鱒二にいたる関西の文化圏の笑いとは、いささか笑いの形式・内容を異にするところがあるように考えられる。後者を瀬戸内海文化圏と呼ぶとすれば、この古来からの成熟した文化の浸透した内海文化において、凡庸で尋常な人間のなかに、近代の均質化作用によってすりつぶされることのない真の智慧をさぐって、無垢の人間性をとりだして、およそ極端なもの、尋常ならぬもの、頹廢的なものに笑いをあびせかけるからである。もちろん、初期の作品には、とぼけて問のびのした、いわゆる「在所言葉」の語法の活用があり、これが妙に山村や陋巷の庶民たちの生活の内部にある叡智や情愛を語り、おのずから透明な飄逸や風趣をもっている、時には誇張されて猥雑野卑にみえることがあっても、概していえば度を越して流れるようなことはなく、まちがっても、そんな感じをいだかせない。

井伏鱒二の生まれた在所は備後の深安郡の加茂村というところであり、そこは昔の中国街道の神辺駅（かんなべ）から西北に入った山谷——芦田川の上流で、加茂川とよぶ流域十里の加茂谷のなかだと、昔の地理書にはしるしてある。私は訪れ

たこともないが、彼が「谷間」を愛する自然の情の由来がわかるし、『雞肋集』その他の故郷について書いた紀行や隨筆から想像せられるところでは、こういう谷間の地主の旧家であつたように考えられる。あるいは地方の豪家を思わせる『丹下氏邸』などは、彼の家「中の土居」に拠つたのかもしれない。彼が鷹揚で、大人の風格をもっているのにかに、細心で注意深く、また義理堅いといわれるのは、或いはこういう旧家の出の故に身についたことであらうか。旅や釣を愛し、山村や都会の陋巷の人たちと気さくにまじわり、その人たちの生活や心情を底から理解し、庶民の奥深い精神をみてとっているのも、こういう村夫子としての生活から習いおぼえ、おのずからそなわつた世間智ではあるまいか。人間生得のさまざまな愚かさも、或いは色欲や物欲といった本能の深さも、また社会の抜きがたい不合理も、却つて真実の人間性をあらわすための日常的な表情であり、これが一脈のヒュウモアを呼んで、却つて浄化する働きをみせるのである。

もちろん、『山椒魚』（昭和四・五・文芸都市）や『鯉』（昭和三・二・三田文学）をとつてみて、まったくモダニズムの時勢粧がなかったわけではないだろう。初め『幽閉』（大正二・七・世紀）として発表したものを、最初の「山椒魚は悲しんだ」の一行を除いて、全面的に改作したとき、た

とえ滑稽な存在としての人間の有り方を諷刺するにしても、或いはまた作者自身のある種の感慨を表現するにしても、この寓話的な仕立てかたには、学生時代に愛読したというロシア文学、とくにチェホフからの示唆があり、あの私どもが口真似た例の「思いぞ屈したる」作家のただの思いつきを諷刺や感慨のおとした影のように大事に考えて変容し、長い不遇時代からの脱却をもとめる気分をこめなかったとはいえない。しかし幽閉されたエゴの象徴としても、人間存在の滑稽性への諷刺としても、非人間的な醜怪な魚の姿に変身して表したときには、人間の世界ならば避けがたい絶望や憂愁や倦怠という人倫的批判をば超えたもののにのがれるからである。それにしても、山椒魚のちょっとした怠慢または失策のために致命的な幽囚の身となり、小魚や銭苦や蛙を相手にするのはかはない悲痛な絶望、矧介な孤独のうちに、ヒュウモアとペイソスとをかもしたす一抹の光明をかよわせ、井伏鱒二の文壇的処女作として、まぢがいない素質を語っている。

おそらく『山椒魚』は彼の不遇な屈託した青春の思いを文学的に語るものであったろうし、『鯉』もまたこの例外ではあるまい。『鯉』はいちど随筆として発表された(大正一五・九・桂月)のちに、改作されて、最後の一節を書き足し、小説化したということである。この由来が語るよう

に、早稲田大学に在学中に親交を結んだ級友青木南八の遺愛の鯉にかけて、その追慕の情を語っているから、私小説的要素を抜きがたくふくんでいる。青木南八に対する友情は深かったようであり、その早逝を悼んで、随筆や小説にくりかえし書いているが、これはその最初のものにあたっている。鯉は川魚のなかでも王者の風格があつて日本人に愛重された、とくに一尺もある白色の鯉といえ、いっそう貫禄充分というところである。早大のプールに放つて、この鯉が王者の如く泳ぎまわり、いくひきもの鮒や鰻や目高を従者のようにしたがえて行くということに、作者の満足できる風格がみとめられるのである。冬になり、氷がはり、薄雪がふつて、その上に三間以上もある大きな鯉の絵を描いてみる。この鯉によせる思念は亡友への追慕の情をあらわすとともに、いまだに志をとげられぬ作者自身の屈託をもらしているようである。

こういう動物を主題にして、傷ついた雁の孤独に自己の孤独を託すような『屋根の上のサワン』等の一連の作品が書かれるし、転じてはこういう心象風景から出て、現実の世俗に尽きない興味をそそぎ、ダム工事に谷底のわが家を失う老友朽助の悲しみを共にする農村小説『朽助のある谷間』などと、題材をひろげ、井伏文学の世態人情が抒情味ゆたかに展開する本領を深めているかに思われる。彼は早

稲田大学に通う一方では、日本美術学校に週に一、二回通って絵の勉強をしたことがあるくらいだから、軽快な筆法で風景画や風俗画を文字で描くために、「人生の叙事詩」を絵画的に分解していつて、しばしば生々流転する人生の諸相のうちに自己の詩情をくみとり、このために思いがけぬ断面を切りとって、これに独自のヒュウモアやペイソスを与え、井伏的なものとするという秘儀がこころみられる。だから、たとえ世俗的な智慧の詐術に出あつても、敢て世俗的な知識の意識的な駆使によって、これを見破りながら、数々の挿話にしたことで表象化するという方法がとられるのである。短篇作家として短篇の構成がすでに挿話の複合であり、筋立てともいふべき筋立てをもたぬところに、特殊の味わいを発揮するという離れ業をみせるのも毎度のことである。私どもが井伏文学に感ずる親しみは、この離れ業とみえたもののなかにある確かな作者の個性的存在という統一性である。

井伏鱒二はまぎれもない短篇小説の作者である。しかしその短篇小説の製作の仕組は、主人公により統一された独立した挿話の連続であり、作者自身の風懷を託すに足るような事件または心理の絵画的分解による展開であるから、これに少し大がかりな題材を与えれば、長篇的結構としての絵巻美を期待することはむつかしくても、ほとんど無拘

束に長篇小説にまで拡大できる要因がふくまれているといふことができよう。彼が昭和六、七年にかけて「川沿いの実写風景」として、この挿話的方法の拡大によって、中篇『川』をこころみしたのは、「遠くのびのび流れる川」をもつて、実写がおのずから長篇の結構をもつ統一性とするものの可能性をあかすにあるといえる。ここで、彼は鳥瞰的視点の移動をむりなく川沿いにおこなうことによって、生々流転の「流行」の姿と、時を超えた悠久なる「不易」の姿とを、同時に寓意することができた。おそらく彼は瀬戸内海沿岸——ひょっとすると、郷里の芦田川のあたりを頭において構想したのかもしれない。この作品に対する井伏の愛着の深さが知られるというものである。

『川』に先だつて着手された『さざなみ軍記』は、平中納言知盛と息子として仮設された平家の公達の日記の形式をかりて、瀬戸内海沿岸の流浪の間に急速に成長してゆく精神の姿を、寿永二、三年の十カ月間の日時に縮約して、展開するという方法で書きあげられている。独立した挿話を連繫して一作にまとめる執筆方式は、昭和五年六月から昭和十三年四月まで、歳月をかけた連作形式によって、主人公の精神の熟成に作者が沈潜して追跡する時間と余裕を可能にしたし、この作品の成功もまたそこにあるといえよう。昭和十年五月から十二年四月にかけて諸雑誌に発表さ

れた『集金旅行』もまた、語り手の「私」という一閑人が、狂言廻しとなり、止宿人のあばずれ女とつれだつて、中国から九州にかけてアパートの部屋代の滞納を止宿人の国許から取立てるために旅をすることにかけて、山陽道の岩国、下関、福岡、尾道、福山の地方都市の地方色を下地に、風変りな相手方との交渉や曖昧な二人連れの関係やの人間模様を浮きだして、同じような挿話方式を絵画的に展開したものと考えられる。こうして井伏鱒二に特有な長篇方式が成立してくると思える。

私は『川』においてひそかに田山花袋の『再び草の野に』を想起し、花袋にとって帰着点のようになったものが、井伏にとっては他ならぬ出発点であることが意味深く考えられてくる。花袋のような作家によって複雑な人生の姿がしだいに「廃墟」としてながめられるような境地に煮つまつていったのに対し、井伏が『川』から出発して積み重ねてゆく人事も風景も、彼を特色づける風変りな途方もないものであることにはまちがいないが、そのくせ常識をふみはずした極端なもの、尋常ならぬものではなく、人間のまことの善意や努力そのものであり、これが他にたいていして強調されるときに、ただ歪曲の仕方によって奇矯粗笨とみえるものの、そこに凡庸な庶民の率直な姿態が実在するといふようなものである。井伏のファンタジイは、そ

の見聞によつて一見表皮的にみえるもののなかに、一風変わったものを造作する稀有な魔術といえるようである。

二

井伏鱒二が随筆『悪戯』（昭和六・七・東京朝日新聞）にしろすところによると、『伊沢蘭軒』を連載中の森鷗外に、中学生の彼が友人の入智恵で、「朽木三助」の仮名をもちいて、史実の誤をただす手紙を書いたことを伝えている。鷗外は、中学生の手紙に、それとは知らずに、二度まで返書をしたため、「筆跡は老人なるが如く、文章に真率なる所がある」などと評しているから、いたずらに見事にひっかかり、たとえ若干の弁疏をみとめるとしても、井伏の筆跡・文章が老成していたことを思わせる。たしかに井伏はスタイリストであり、その漢語や俗語や略語や造語の使用に妙を得ている。きわめて技巧的でありながら、かならずしも自己誇示に急なところはなく、却つて非個人的な完成を思わせる平明無垢な頑是なさをみせている。これはある意味で鷗外の文体を想起させる古典的とも名づくべきものであり、簡潔をめざした歴史小説、とくに『記録文学叢書8』として、昭和十二年十一月に書きおろして刊行された『風来漂民奇譚 ジョン万次郎漂流記』には、もっとも顯著にみとめられるところではないか。

徳川時代にみられた日本人の海外漂流譚については、つとに石井研堂校訂編纂になる『漂流奇譚全集』（続帝國文庫）と『異國漂流奇譚集』（福永書店版）があり、中浜万次郎のものは、前者に『漂客談奇』、後者に『漂流万次郎帰朝談』がおさめられている。その後、東京大学医科大学で森鷗外と同級生であった中浜東一郎がその亡父を伝して、『中浜万次郎伝』（昭和一一・四・刊）を書いたときには、前記のほかに、写本『漂客瑣談』を得て、材料としたことが明らかにされている。井伏鱒二の小説『ジョン万次郎漂流記』は、これら先蹤の業績を参照して、『記録文学』として、つとめて簡潔に客観的な叙述法をもって書いていることは明らかであり、この場合、みだりに作者の風懷さえをも託すことを差しひかえているかにみえる。原素材とくらべて、作者のファンタジイをもって描かれるべきものを効果的に計算するとともに、彼がとかく走りやすい個性の演技や細叙や口跡をおさえ、作者自身の刻印をきれいに消し去り、古典的な端正な文体として清冽をきわめている。

『ジョン万次郎漂流記』は昭和十二年下半期の第六回直木三十五賞をさすけられ、彼は恬然としてこの場違いの文学賞をうけた。井伏の作品には当初のモダニズム文学の雰囲気になかで、通俗性とみあやまれるような危険のあるものがないことはないし、時には森鷗外の歴史小説でさえも

高級講談視する時代の狂いはある。だから、井伏の作品にある芸術的香気や品格が反対に評価され、この作品のように古典的な整合を、真価とは逆の通俗的な場所に引き上げて眺められることも出てくる。しかし性急な評価とは反対に、彼の配慮をうわまわる人間感情の把握と没個性的な文体のこくともって、ゆうに上まわったものになっているというべきである。

これより約二十年近くおかれて書かれる『漂民宇三郎』（昭和二九・四・一三〇・一二・群像）は、ジョン万次郎の漂流に二年先立つ越中富山の漂民譚であり、『ジョン万次郎漂流記』よりも幅広く材料をあさって、豊富に書きこんで大作としている。いわば万次郎の場合には、かなり有名であるがために、省略に意をもちいて簡潔を旨としたとすれば、宇三郎の場合には、逆に周辺の材料をあさって、ファンタジイを豊かにはぐくみ、かなり綿密に書きこんで、しかも的確な措辞をもちいて、透明な興趣や風韻をうみだすことに成功している。私には『ジョン万次郎漂流記』の簡潔も、『漂民宇三郎』の豊饒も、甲乙ないものにみえるけれども、前者の直木賞に対し、後者は昭和三十一年度芸術院賞におされている。もっとも、大佛次郎の『帰郷』が昭和二十四年度芸術院賞となった事例もあるのだから、こういう功労賞の上下によって作品の価値は決定されるもので

はない。

通俗性と紙一重のところで大衆的興味に應ずるという意味では、『ジョン万次郎漂流記』に先立つ『集金旅行』があり、後では『多甚古村』があげられる。前者の仮りに集金人と名づけるべき「私」にあたる狂言廻しが、後者では村の駐在巡査であり、この「駐在日記」の形をかりて、無数の挿話を連繫して、一篇の長篇小説の形式にまとめあげたものにほかならない。昭和十四年一月から七月にかけて諸雑誌に連載された正篇のほかに、昭和十五年五月にまとめられた『多甚古村補遺』がある。しかも作者は新任の三十歳ばかりの駐在巡査——権力の末端としてその代弁者であるような官憲意識に倣っている「警官」ではなくて、村人とかわらぬ通常の朴訥な善人であり、村の駐在としての服務觀念や自尊心のなかに、庶民としてはごくあたりまえの正義心を露呈させるといった「村の駐在さん」——を借りて、その職掌がら村の生活の表裏・その機微に通じていることから、村全体の生活記録をつづるところに、作者のユニークな特色を存分に發揮しようところろみるし、またそれにまちがいないのである。

だから、『多甚古村』は題辭に「干潟にはさざら波、梅の村に入る」といった瀬戸内海沿岸、ひょっとしたら阿波あたりの南国海浜の農漁村を舞台にして、歳末非常警戒か

ら、この平和な村にもみられる博徒、私娼から漁夫、隠居その他の村人たちによる喧嘩、自殺、犯罪といった出来事が興ののるままにつづられている。したがって、作者はいかにも手慣れた軽快な筆つきで、生活の機微をつく人生絵巻、風俗画を盛沢山に重ねて、やや世俗的興味に身をいれすぎているのではないか、という危惧をおぼえさせるほどである。世間話は、多彩であり、深刻であるほど、ひとは好奇心にとらわれて、興味の度を深め、人間通とも世間通とも、思いがちなものである。井伏文学の半面にはこういう人情世態の面白さがあり、これが通俗性にも通じているけれども、その半面において作者自身が生活感情の腐蝕に気づいて、現実認識や批判の欠陥を、駐在巡査への仮装または韜晦によって、風俗への愛好と諧謔への擬態に真実の情感や審美の意識の確保を意識的につとめるところがあったと解されはしまいか。

いうまでもなく、『多甚古村』の成立は、支那事変がすでにまちがいはなく泥沼に入りこんで、いよいよ日常生活のなかに戦時体制が濃密に浸し透ろうとしている時代にあたっていたといわなければならない。冒頭の「歳末非常警戒」が「出征兵に対する見送人雑沓取締」のために、ゲートルを巻いて「沖津駐在」に集合の電話があつて駆けつけ、憲兵まで立ち会っている状況から書きつけてゆく。だか